

## 特集論文

# 小学校教員を目指す学生の「外国語(英語)活動に関する演習科目」履修がもたらす学生の変容

松宮 奈賀子\*

\*広島経済大学経済学部

## Changes in Attitudes Toward Teaching English on the Part of University Students Studying to be Elementary School Teachers: The Effect of a Relevant Teaching Methods Course

Nagako Matsumiya \*

\* Department of Economics, Hiroshima University of Economics

This paper aims to investigate the effect on university students (who hope to become elementary school teachers) of a course on how to teach English in elementary schools.

The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology announced that English education will become a compulsory subject in 5th and 6th grade as of the academic year 2011. Since English hasn't been taught in elementary schools in Japan for many decades, most elementary school teachers have almost no experience teaching the language, and have little knowledge of English or how to teach it. Because of this, it is considered an urgent need to train teachers in preparation for the 2011 implementation. It is also important to train future-teachers who are studying at universities to become elementary school teachers. This paper focuses on some such students who are majoring in elementary school education and who have taken a semester-long course on how to teach English in elementary school. The change in their attitude toward teaching English is measured by a questionnaire, and how they've changed their ideas and issues that remain are discussed in this paper.

**Keywords :** English Education at Elementary Schools, Teacher Training Course at University, University Students

キーワード : 小学校外国語 (英語) 活動, 教員養成課程, 大学生

## 1. はじめに

1992年に小学校における外国語(英語)活動実践に関する最初の研究開発学校2校が指定されて以来,外国語(英語)活動に取り組む小学校の数は年々増加し,2007年度には全国の97.1%の小学校が何らかの形で外国語(英語)活動を実施したとされている(文部科学省,2008a)。そして2008年3月に告示された新しい小学校学習指導要領では,小学校第5学年および第6学年に

---

\* 〒731-0192 広島市安佐南区祇園5丁目37-1 広島経済大学経済学部

Correspondence concerning this article should be sent to: Nagako Matsumiya, Hiroshima University of Economics, 5-37-1 Gion, Asaminami-ku, Hiroshima, 731-0192, JAPAN.

## 小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」 履修がもたらす学生の変容

年間 35 時間の「外国語活動」が必修として位置づけられることとなった。これにより新学習指導要領が全面実施となる 2011 年（平成 23 年）度からは全ての小学校の高学年において外国語活動が実施されることとなったのである。

そこで重要となってくるのが指導者の問題である。小学校ではこれまで外国語（英語）の指導が行われてこなかった。したがって外国語（英語）を指導した経験もそのための知識も持たない教員がほとんどである。しかしながら小学校における外国語（英語）活動においては、児童の実態を最もよく把握している学級担任の存在意義は大きく、初めて学習する外国語に戸惑う児童に対して適切な支援をしている学級担任が中心となって授業を構築していくことが重要と考えられている。そこで現在は各市町村の教育委員会や各学校において現職教員を対象とした研修が重ねられており、2011 年の全面実施へ向けた準備が進められている。

指導者の育成という点においても一つ重要と考えられるのが、大学の教員養成課程における小学校外国語活動に関する指導である。既に小学校で外国語活動が導入されることが確定した今、これから学校教育現場へと羽ばたいていく教員を目指す学生たちに、外国語活動に関する知識と指導技術を学ぶ機会を用意することは喫緊の課題といえるだろう。実際に、いくつかの小学校教員養成課程を持つ大学では既に外国語（英語）活動の指導に関わる科目を開講しており、教員を目指す学生への指導も始まりつつある。本稿ではそのような大学の教員養成課程で学ぶ大学生を対象とした「外国語（英語）活動に関する演習科目の履修がもたらす学生の変容」と「これからの課題」を学生への質問紙調査結果から検討する。教員養成課程における指導はまだ始まったばかりであり、より充実した指導のあり方を検討することは急務と考える。

本稿では大学の教員養成課程において開講された小学校外国語（英語）活動に関する演習科目を履修した学生が、その履修を通してどのように外国語（英語）活動を指導することへの意識を変容させたか、また、どのような課題、あるいは不安を履修後も解消できずに抱えているかを履修終了後に実施した質問紙調査の結果より明らかにすることを試みる。本調査の結果が、まだ一部の大学で始まったばかりの外国語（英語）活動に関する指導のあり方を再検討し、その改善に貢献できることを期待する<sup>1</sup>。

<sup>1</sup> 小学校における英語を取扱った学習はこれまで各校によって自由な名称で呼ばれてきた。最も多くの小学校によって採用された一般的な表現が「英語活動」である。文部科学省による英語を取扱った学習の実施状況調査においても「小学校英語活動実施状況調査」の名称が使用されている（最新の 2007 年度調査まで一貫して「英語活動」を使用している）。しかしながら、2008 年 3 月に告示された新しい小学校学習指導要

## 2. 小学校における外国語(英語)活動概観

既に簡単に小学校における外国語(英語)活動の導入までの経緯や今後の展開について述べたが、本章では改めて外国語(英語)活動が現在のような全国的な実践へと広がっていった経緯と、それによって生じた問題についてまとめ、今後の必修化に向けてどのような準備が必要であるか、特に指導者育成に焦点を当てて検討する。

1992年に最初の研究開発学校2校が指定されて以来、外国語(英語)活動に取り組む小学校の数は年々増加していった。少数の研究開発学校における先駆的な取り組みから、全国的な実践へと移行する大きなきっかけとなったのは2002年度からの現行学習指導要領の全面実施であった(1998年告示)。現行学習指導要領では「総合的な学習の時間」が新設され、その中で学校裁量において「国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等」が実施可能となった。このことが小学校における外国語(英語)活動が全国的な広がりを見せる大きな契機になったと考えられる。その後、大変な速度で全国的な取り組みへと展開したことは表1からも明らかである(文部科学省, 2006a, 2006b, 2007, 2008a; 松川・直山, 2008)。

表1 現行学習指導要領全面実施後の小学校外国語(英語)活動実施状況

年	実施校%	備考
2001 (H13)	41.8%	
2002 (H14)	56.1%	現行学習指導要領全面実施
2003 (H15)	88.3%	
2004 (H16)	92.1%	
2005 (H17)	93.6%	
2006 (H18)	95.8%	
2007 (H19)	97.1%	

領では、第5学年および第6学年に導入される活動の名称として「外国語活動」が採用されている。このように名称に混乱が見られるため、本稿においては、これまで多くの学校において実践されてきた活動を小学校「外国語(英語)活動」と呼び、2011年度からの学習指導要領全面実施以降に導入される必修の「外国語活動」について言及する際のみ「外国語活動」の名称を使用する。なお、学生が自由記述の中で「英語活動」と表現した場合には、それをそのまま採用している。

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

表2 2007（H19）年度の外国語（英語）活動実施時間数

実施時間数	第5学年		第6学年	
	校数	%	校数	%
1-3	2,167	10.6	2,099	10.1
4-11	8,237	40.4	8,357	40.2
12-22	5,406	26.5	5,472	26.3
23-35	3,837	18.8	3,931	18.9
36-70	741	3.6	890	4.3
71以上	16	0.1	22	0.1
合計	20,404	100.0	20,771	100.0

表1の実施状況を見ると、ほとんど全ての小学校において何らかの形での外国語（英語）活動が実施され、どの学校もある程度の経験を積みつつあるとも考えられる。しかしながら、実際には上記調査結果は1時間でも実施した学校は「実施した」と計上されている。一方で年間70時間を外国語（英語）活動に費やした学校も同じく「実施した」とカウントされている。そのため97%を超える小学校において外国語（英語）活動の実践があったといっても、その実情は大きなばらつきがあるのである。では、実際にはどの程度の時間数の実践がなされてきたかを次の表2にまとめた（文部科学省、2008a）。

表2からは2007年度に外国語（英語）活動を実施した学校の約半数が年間11時間以下の実施であることが分かる。一方で36時間以上実施した学校も存在し、学校間にばらつきがあることが伺える。このような状況を文部科学省（2008b）は「必ずしも良い傾向とは言いがたい。市町村により導入の形態が異なったり、近隣の学校間に差が生じている場合には、児童や保護者に不安感を抱かせることになり、続く中学校での英語教育にも弊害をもたらすことになりかねない」とし、状況の改善を図る必要性があることを示している。このような現状を打破する目的および、急速なグローバル化が進む社会背景や小学生が持つ柔軟な適応力を背景に、2008年に告示された新しい学習指導要領では小学校第5学年および第6学年に年間35時間の外国語活動が必修化された。しかしながら、表2に示したように、多くの学校にとって年間35時間の外国語活動実施は未知の時間数であり、実践に向けての準備が必要であることは想像に難くない。

そこで、2011年度（平成23年度）からの新学習指導要領全面実施に備え、

教員を対象とした研修が多く開催されている。小学校における外国語活動の実施に当たっては、指導者に対する研修がきわめて重要とされ（文部科学省，2008b），教育委員会指導主事等を対象とした5日間に渡る指導者養成研修，および各校から2名（2008年度1名，2009年度1名）の教員が参加する5日間程度の中核教員研修が開催されている。さらに2008年度から2010年度までの3年間で各校30時間の研修を実施することとされており（松川・大城，2008），現職教員を対象にした研修を通しての実践準備が着実に進んでいることが伺える。

このような現職教員への研修とともに重要となるのが，大学の教員養成課程における指導であると考えられる。現職教員と同様に，小学校教育現場へと巣立っていく大学生が外国語活動についての一定の知識と指導力を身につけることは重要なことであり，実際，小学校教諭免許状の習得を目指す学生を対象に外国語（英語）活動指導に関する科目を開講する大学も増えてきている。本稿では，そのような教員養成課程を持つ大学における外国語（英語）活動指導に関する演習科目を履修した学生がその履修前後においていかに外国語（英語）活動に対する考え方を变化させたのかを質問紙調査の結果から検討する。それにより，大学における受講がどのように教員を目指す学生の意識向上に役立つのか，そしてさらなる課題は何であるかを明らかにしたい。

### **3. 「小学校外国語（英語）活動指導に関する演習科目」の履修前後における受講者の意識の変容**

#### **3. 1. 科目の概要**

本調査の調査協力者が履修した科目は，ある教員養成課程を持つ大学における小学校外国語（英語）活動に関する演習科目である。この授業において学生は小学校ではどのような外国語（英語）活動が行われているのかを実際に外国語（英語）活動の中で用いられる代表的なアクティビティ（ゲームや歌など）を通して学び，さらにはそのような活動を展開する際に学級担任としてどのような点に留意すればよいのかを履修者自身が考えることを通して，実践への理解を深めていく内容になっている。授業は半期で全15回行われ，そのうちの最後の4回は学生による模擬授業にあてられた。模擬授業は4人程度のグループで行われ，学級担任とALTのティーム・ティーチング形式で行うよう指示された。模擬授業終了後には他の履修学生からのコメントを授業者に渡し，授業参観者の目から見てどのような点が評価でき，どのような改善点が考えられるのか等の意見を授業者に還元した。なお，この科目は4年次生の後期に開

講され、履修者は前期に外国語（英語）活動に関する理論を学ぶ講義科目の履修を済ませている。

### 3. 2. 調査の概要

4 年次生後期に開講される外国語（英語）活動に関する演習科目の最後の授業時（第 15 回目）に履修者の履修前後における指導への意識の変容を尋ねるアンケート調査を実施した。アンケートは選択式に回答する質問 4 問と自由記述を求める問い 7 問から構成された。アンケートの回答前には、回答内容が成績評価に影響することはない旨が伝えられた。本報告では 2007 年 3 月および 2008 年 3 月に回収したものを検討の対象とする。2007 年 3 月に実施した調査は 2006 年度後期の履修者を対象としており、一方 2008 年 3 月に実施したアンケート調査の回答者は 2007 年度後期に開講された演習科目の履修者であり異なる学生である。ただし、授業そのものの流れは 2 年とも同様のものではあった。2007 年 3 月実施の調査への回答者は 37 名、2008 年 3 月実施の調査への回答者は 55 名であった。

### 3. 3. 結果

#### 3. 3. 1. 選択回答質問に対する回答結果から見る履修学生の変容

選択式の設問としては全 4 問を用意した。うち 3 問を本稿での分析対象とする。

1. 英語を指導することへの興味・関心は履修前より高まりましたか？
2. 英語を指導することへの意欲は履修前より高まりましたか？
3. 英語を指導することへの自信は履修前より高まりましたか？

上記設問 1. ～設問 3. は外国語（英語）活動を指導することへの意識の変容を尋ねる質問項目であり、1) とても高まった、2) 高まった、3) 変わらない、4) 低くなった、5) とても低くなった、6) はじめから高かった、の 6 つの選択肢から回答を求めた。

外国語（英語）活動を指導することへの興味・関心の履修前後における変化を尋ねた設問 1. に対する回答結果は表 3 のとおりである。2007 年の調査（以下 2007 年と省略）、2008 年の調査（以下 2008 年と省略）ともに、95%を超える学生が「とても高まった」あるいは「高まった」と回答していた。また、2007 年、2008 年ともに「変わらない」と回答した学生が 1 名いたが、興味・関心が「低くなった」という学生は皆無であり、外国語（英語）活動への興味・関心という点においてはほぼすべての学生に肯定的な変容が見られたといえ

表3 小学校での外国語（英語）活動指導への興味・関心の履修前後の変化

	2007		2008	
	人数	%	人数	%
とても高まった	26	70.3	35	63.6
高まった	10	27.0	18	32.7
変わらない	1	2.7	1	1.8
低くなった	0	0.0	0	0.0
とても低くなった	0	0.0	0	0.0
はじめから高かった	0	0.0	1	1.8
合計	37	100.0	55	100.0

表4 小学校での外国語（英語）活動指導への意欲の履修前後の変化

	2007		2008	
	人数	%	人数	%
とても高まった	24	64.9	30	54.5
高まった	12	32.4	25	45.5
変わらない	1	2.7	0	0.0
低くなった	0	0.0	0	0.0
とても低くなった	0	0.0	0	0.0
はじめから高かった	0	0.0	0	0.0
合計	37	100.0	55	100.0

る。この結果から、当該演習科目の履修は外国語（英語）活動への関心を喚起することには成功していることが伺える。

また、外国語（英語）活動を指導することへの意欲の変化を尋ねた設問 2. においてもほぼ全ての学生が指導意欲を向上させていることが明らかとなった（表 4 参照）。表 4 を概観するとほぼすべての回答者が指導への意欲が「とても高まった」あるいは「高まった」と回答していることが分かる。一方で設問 1. と同じく指導意欲が低下したという学生は皆無であった。

次に外国語（英語）活動を指導することへの自信の変容を問うた設問 3. への回答結果を表 5 に示す。表 5 を見ると 2007 年は約 65% の学生が、2008 年は 70% 強の学生が「自信が高まった」と回答したものの、「とても高まった」との回答者は 2007 年が 8.1%、2008 年が 12.7% と少なかった。また、指導へ

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

表5 小学校での外国語（英語）活動指導への自信の履修前後の変化

	2007		2008	
	人数	%	人数	%
とても高まった	3	8.1	7	12.7
高まった	24	64.9	40	72.7
変わらない	6	16.2	8	14.5
低くなった	3	8.1	0	0.0
とても低くなった	1	2.7	0	0.0
はじめから高かった	0	0.0	0	0.0
合計	37	100.0	55	100.0

の自信の度合いは「変わらない」という回答も 15%前後見られた。このことから、関心や意欲は半期間の演習科目を履修することによって高めることに成功しているが、実際に指導することへの自信となると、すべての履修者に十分な変容をもたらすことは出来なかったといえる。また、2007年には3名の学生が「自信が低くなった」と回答し、1名は「とても低くなった」と回答している。外国語（英語）活動を指導するための知識や技術を身につけ、理解を深めることを目的とした演習科目を履修した結果、自信が低下したことは残念なことであり、その理由を検討することは重要なことと考える。そこで、次節では外国語（英語）活動指導に対して、当該演習科目を履修する前と後のそれぞれの段階でどのような思いを履修者が抱いていたのかを学生の自由記述から検討する。

### 3. 3. 2. 自由記述回答質問に対する回答結果から見る履修学生の変容

前項における選択式質問への回答結果から、当該演習授業の今後の課題として、外国語（英語）活動指導への自信を伸ばすに至らなかった学生の存在がある。そこで本項では、学生の自由記述回答から、前項における数値による結果をより具体的に考察していきたい。

自由記述による回答を求める質問は全部で7問用意された。そのうち履修前後の気持ちの変容を尋ねる設問1. および設問2. を本稿では取り扱うこととする。ここいう「気持ち」とは、選択式の設問において尋ねた「興味・関心」、「教える意欲」、さらに「指導への不安」などすべてを含んでおり、選択式設問1. ～3. に対するより具体的な意見を求める質問である。実際に提示した質問は下記のとおりである。

自由記述設問 1. この授業を履修する前、小学校での英語活動に対してどんな気持ちを持っていましたか？「不安・心配」、「興味・関心」、「教える意欲」などに言及して書きなさい。

自由記述設問 2. この授業を通して、設問 1. の気持ちに変化はありましたか？それはどのような変化でしたか？

自由記述を検討するに当たっては、学生からの意見をすべてカードに書き出し、それを同意見ごとにまとめていく方法で分類をおこなった。学生によっては 1 つの質問に対して複数の意見を記述している場合があったが、その場合はそれぞれを 1 つの意見として取り扱った。したがって回答者数と得られた意見数は一致していない。また、学生によっては同一分類カテゴリーに属する意見を複数記述した者もあり、場合によってはある分類カテゴリーの意見数が実際の回答者数を上回っている場合もある。

### 3. 3. 2. 1. 自由記述設問 1. (2007 年)

その結果、2007 年の履修前の心情を尋ねた自由記述設問 1. からは表 6 のような分類ができた。

主な結果としては 2007 年の学生の多くが、自らの英語力が不十分と感じていること、および小学校外国語（英語）活動に対して明確なイメージを持っていないことから指導に不安を感じていることが明らかになった。今回の履修者の多くは自分自身が外国語（英語）活動を体験しておらず、また教育実習等で授業実践を見る機会もあまり得られなかったことから、何をどう指導していくのかわからないという思いを履修前には抱いていたようである。

また、外国語（英語）活動導入自体に疑念を抱いている学生もかなり多いことが明らかになった（分類 2）。その理由としては児童の負担増、教員の負担増、そして英語よりも先に育成すべきものがあるというものであった。

一方、2007 年調査の回答者の中には小学校での外国語（英語）活動の体験者も僅かながらいることが明らかになった。2007 年の履修者の多くは 1997 年まで小学校で学んでおり、これは先進的な取り組みを行う学校では既に外国語（英語）活動が始まっていた時期である。そして興味深いのは、その体験がどのようなものであったのかが指導への意欲や戸惑いなど異なる感情へとつながっていることが示されたことである。2007 年の回答者のうち 3 名が自身の小学校時代に外国語（英語）活動を体験した経験を持っていたが、その 3 名が指導に対して履修前に抱いていた思いを上記分類で分けると「分類 1：不

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

表6 小学校での外国語（英語）活動指導への自信の履修前後の変化

	記述内容	意見数
分類 1	指導に大きな不安を感じていた	36
	⇒ 英語が苦手であることに起因する不安 「発音が苦手」、「話せない」、「英語活動を指導する資質が自分にはない」	19
	⇒ 何を教えてよいのか、授業のイメージがつかめないことに起因する不安	9
	⇒ 全く英語を知らない児童に教える不安	2
	⇒ 外国語（英語）およびその指導についての学習経験が少ないことに起因する不安	2
	⇒ 急な導入に起因する不安 「大学入学時から導入を見据えて準備してきたわけではなかった」	1
	⇒ 自分自身の英語活動体験から 「自分が小学生の時に体験した外国人の先生がよく理解できなかった」 「授業のイメージはあるが、指導は不安」	2
	⇒ 卒業後に教育特区として英語教育を実践している地域に勤務することが決まっているため、やらなくてはならないという現実的な義務感からくる不安	1
分類 2	導入に反対	17
	⇒ 小学校に外国語（英語）活動を取り入れる意義がわからなかった	5
	⇒ 国語力低下に拍車をかけるのではないか 「日本語すらままならない段階で英語を指導する必要はない」 「英語の時間を作るくらいなら国語を増やした方がよい」	4
	⇒ 導入の意義がわからないから、指導する意欲はなかった	2
	⇒ 小学校段階で英語を学ぶのは早いと思っていた	2
	⇒ 全教科を教える小学校教員のさらなる負担増になる	2
	⇒ 中学校英語の前倒しというイメージがあった	1
	⇒ 学力低下問題など喫緊の課題が他にあり、ただでさえ時間が足りない	1
分類 3	指導に前向きだった	6
	⇒ 英語が好きだから	3
	⇒ 小学校で英語活動導入のニュースを聞いて指導へ興味を持っていた	1
	⇒ 前期の理論についての講義科目で実践の意義を学んでいたから	1
	⇒ 教育実習で英語活動の楽しさを観察したため	1
	⇒ 自分自身の英語活動体験から 「自分が小学生の時に体験した英語活動が楽しかった」	2
分類 4	教える意欲が全くなかった	5
	⇒ とにかく自分にはできないという思いから教える意欲がなかった	5
分類 5	他人事に考えていた	4
	⇒ ALT や JTE がやってくれるだろうという楽観的観測を持っていた	3
	⇒ 自分にはできるわけがないという半ば投げやりな気持ちから他人事のように捉えていた	1

安2名]、「分類3：前向き1名」に分けられた。指導に不安を感じていた学生のうち1名は「自分が小学生の時、ALTの先生が来てゲームをしたり、外国の話の聞いたりした経験があり、活動のイメージはできていたが、実際に指導する場面になったらどうしたいかわからず不安を感じていた」と述べており、授業を受けることと指導することとの違いに不安を感じているようであった。一方、もう1人の不安を感じていた学生は「自分が小学生の時に外国人の先生による英語の授業があったが、何をどうすればよいのかわからない授業という印象をその当時に受けてしまい、指導することに不安を感じていた」と述べている。この学生は自身の小学校時代の経験が負の記憶として残っており、そのようなマイナスのイメージが残っている外国語（英語）活動の指導することに不安を覚えているようであった。それに対して「分類2：前向き」の意見を挙げた学生は「自分が小学生の時『コミュニケーション科』という授業があり、楽しい記憶が残っていたので、英語活動のイメージもしやすく、大変興味があった」と述べている。

さらに2007年の回答からは、小学校において外国語（英語）活動を行うことへの意義が明確でないがゆえに指導に後ろ向きであったり、指導は「誰か」がやってくれるものと他人事のように考えたりしている学生の存在も明らかになった。

### 3. 3. 2. 2. 自由記述設問1. (2008年)

次に、同じ質問（履修前の気持ち）に対する2008年の回答をみていく。

2008年の調査でもやはり最も多くの学生が抱いていた心情は「分類1：不安」であり、中でも自身の英語力が十分ことに起因する不安を多くの学生が抱いていることが明らかになった。この英語力に関する不安もさらにいくつかの下位グループに分けることができた（表7）。

グループ1：とにかく英語力不足が不安

グループ2：英語に苦手意識を持っているが故に児童に英語の楽しさを伝えられるか不安

グループ3：ALTの話す英語が理解できるか、ALTとうまく協同していけるか不安

グループ4：外国語（英語）活動が音声中心と理解しているが故に、自分のカタカナ発音が不安

グループ5：中学校英語と同じようなスキルを指導しなくてはならないと思いつんでおり、その指導には自分の英語力が足りないという不安

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

表7 自由記述結果（2008年 設問1.）

	記述内容	意見数
分類1	指導に大きな不安を感じていた	63
	⇒ 英語が苦手であることに起因する不安 「発音が苦手」、「話せない」、「ALTと授業ができるか」	40
	⇒ 何を教えてよいのか、授業のイメージがつかめないことに起因する不安	16
	⇒ 自分で指導計画を立てることへの不安 「教育実習時には学校側が指導計画も教材も用意してくれた」 「児童が興味を持てる授業づくりができるか不安」	2
	⇒ とにかく不安（理由の明記なし）	2
	⇒ はじめて英語に触れる児童に教える不安	1
	⇒ 保護者の期待に応えられるような授業ができそうにない不安	1
	⇒ 自分が教える立場になるとは想像しておらず、突然の事態への不安	1
分類2	導入に反対	7
	⇒ 指導する教科が多く、児童も教員も負担が増える	3
	⇒ 小学校に外国語（英語）活動を取り入れる必要があるのか疑問	2
	⇒ 国語もまだ身につけていないのに英語を学ぶ必要があるのか疑問	2
分類3	指導に前向きだった	14
	⇒ 英語が好きだから	4
	⇒ 教育実習で英語活動の楽しさを観察したため	3
	⇒ 自分自身の英語活動体験から 「自分が小学生の時に体験した英語活動が楽しかった」	2
	⇒ コミュニケーション重視の小学校外国語活動では工夫次第で楽しい活動ができそう	2
	⇒ もともと興味を持っていた	2
	⇒ 現場でいきなり新しい授業を任されるのではなく、大学で学ぶことができるので、外国語活動について学ぶことに興味を持っていた	1
分類4	教える意欲がなかった	6
	⇒ 実際に教えるという意欲が持てなかった 「外国語活動に良い印象がなかった」、「できれば教えたくない」	6
分類5	他人事と考えていた	3
	⇒ ALTやJTEに任せればよいと思っていた	3
分類6	義務感を感じていた	1
	⇒ 「教えない」より「教えなくてはならない」という義務感で捉えていた	1

実際には「自分が英語を話すことが苦手なため、英語の楽しさを伝え、外国への興味を持たせるような授業ができるか不安」や「児童が興味を持って尋ねてくる英語の質問に自分の英語力と発音できちんと答えられるか不安」、「英語が苦手なため、間違った英語を児童に教えてしまったらどうしようと不安に思う」、「自分の英語力が低いため、児童に対してあいまいな授業を行ってしまうのではないか不安」などの記述が見られた。これらの指導者としての自らの英語力に対する不安を述べる意見は、裏を返せば「うまくやりたい」、「子どもたちに英語の楽しさを伝えたい」、「正しい英語を教えたい」といった指導への意欲の表れとも考えられる。指導への熱意があるからこそ、不安な感情を抱いているとも考えられるのではないだろうか。この学生の気持ちをくみ取って、英語力の高さではなく学級担任に求められる役割を果たせる指導者へと導いていくことが重要と考えられる。

導入に反対（分類 2）という考えは、2007 年同様に何人の学生からか挙げられていたが、2007 年と比較するとその数は減少していた。2007 年の調査協力者が 37 名、2008 年の調査協力者が 55 名であり、2008 年の方が多くの回答者があったにもかかわらず、導入に反対する意見数は半数以下に減少していた。この理由としては 2008 年の回答者は外国語活動の導入が現実のものとなろうとしていることをニュース等で知っており、既に「自分も外国語活動の指導にいずれ関わるのだ」という認識を持っていたことが考えられる。導入するか否か、賛成か反対かを議論する段階は既に去っていることを理解していたことが、この導入反対意見の減少の背景にあると考えられる。

その一方で、「誰かが教えればよい」という他人事の姿勢でいた学生や、指導への意欲が履修前には見られなかった学生は 2008 年にも存在した（表 7 参照）。

### 3. 3. 2. 3. 自由記述設問 2. (2007 年および 2008 年)

これまで履修前にどのような気持ちを学生たちが抱いていたのかを 2007 年、2008 年の自由記述より概観した。その結果、大半の学生が「不安」を抱いており、具体的には自分自身の英語力が不十分と感じていることに起因すると不安と外国語（英語）活動では何をどう指導していけばよいのかイメージ出来ない未知の活動であることへの不安に大別できるようであった。また、外国語活動に意義を見いだせない学生や、「誰かがやってくれるもの」という認識を持っていた学生の存在も明らかになった。これらの学生が半期に渡る演習科目で

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

の指導および模擬授業経験を経て、どのように外国語活動指導への考えを変容させたかを自由記述設問 2. から検討していく。

学生たちの記述は「不安が軽減したか否か」という単純な記述ではなく、「いかに不安が軽減されたか」を述べており、また「不安が軽減されて、指導意欲と自信が増した」というように複数の情報が含まれる場合もあった。そのため、自由記述を分類することは非常に困難であった。しかしながら、彼らの履修後の声は今後同様の科目を展開していく大学や当該授業を改善していく上でも貴重なものである。そこで、ごく大まかに 10 のカテゴリー（2007 年は 11 のカテゴリー）に意見を分け、学生からの意見をそのまま掲載することとする。

表8-1 自由記述結果（2007年 設問2.）

1. 不安の軽減（英語力）
－ 今でも英語力は不安だが、教材や活動を工夫することによって英語力をカバーできるのではないかと考えられるようになった
－ 履修前は教師の英語力が直接授業に影響すると考えていたが、先生が楽しそうに歌ったり、活動したりすることで興味の持てる授業になるのだと理解できた
－ 模擬授業をして、やはり自分の英語力のなさを実感したので、英語力への不安という気持ちに変化はないが、授業の全てを英語で話さなくてもよいということが分かり、不安はかなり軽減された
－ 英語が苦手でも頑張って一生懸命やれば大丈夫という気持ちになった
－ 自分の英語力不足による不安は少し和らいだ
2. 不安の軽減（外国語活動の内容や授業の流れを学んで）
－ 履修により英語活動の具体的なイメージが湧いたため、少し安心した
－ 英語活動ではこのようなことをすればよいということが理解できたため、自分にも指導出来そうだという気持ちになり、教える意欲ややる気が出た
－ 英語活動についての授業イメージが持てるようになり、不安な気持ちが軽減した
－ 履修前に不安を感じていた要因として経験不足があったと思うが、履修することによって「そんなに怖れなくても良いのだ」と感じられるようになった
－ 活動の種類を多く学んだので、活動内容への不安はかなり軽減された
－ 実際の授業の流れや気をつけるべき点を学んだことで、なんとかやっていけそうという気持ちになれた
－ 教えるための道具となる活動を多く学べたことで、安心が心に生まれた
－ 実践例に多く触れることで、自分が指導することへの不安や心配は少し無くなった
－ 「どうしたら良いのか」という不安は消えた
3. 不安の軽減（中学校のような英語知識、スキルの指導は求められていないことを学んで）
（該当意見なし）
4. 不安の軽減（その他）
－ 英語活動は楽しいものだということが分かり安心した
－ 自分が教えることに対してまだ不安を感じてはいるが、履修前よりは軽減された
－ 履修により不安や心配は軽減された
－ 履修前の不安だった気持ちは「なんとかなる」という思いに変化した
5. 意欲の向上
－ 不安を感じるばかりではなく、もっと当たり前にあるものを教材化するよう常に意識して物を見るようにしようという思いが強くなった
－ 指導法を学ぶことで自分も教えたいという意欲が高まった
－ 児童の実態や学習意欲に応じた対応ができ、一緒に楽しめる教師になりたいという気持ちを抱くようになった
－ 何かを教え込まなくてはならないのではなく、楽しく活動し、コミュニケーション能力を育てることが小学校の英語活動だと理解できたので、来年から現場で授業をしてみたいという気持ちになった
－ もっと多くの活動を知りたい、指導案を見てみたいなど興味関心、教える意欲が高まった

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

表8-2 自由記述結果（2007年 設問2.）

5. 意欲の向上
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 小学校で英語を指導したいと強く思うようになった</li> <li>－ 英語活動を通して児童が人とのコミュニケーションの大切を知ったり、異文化に触れて自らを振り返るチャンスを作ったりできる活動であると感じ、指導する意欲が増した</li> <li>－ 模擬授業で「なんとかできる」という経験をしたことで、やってみようという気持ちが高まった</li> <li>－ 授業を通して小学校現場での活動内容を知ることが出来、もっと知りたいと思うようになった</li> <li>－ 子どもたちに英語の楽しさを伝えたいという意欲が湧いた</li> </ul>
6. 自信の向上
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ この授業を通して、自分でも英語を指導できるのではないかと自信を持つことができたことは大きな変化だった</li> <li>－ 多くの活動例を学んだこと、模擬授業を通して自分たちで1つの授業を作った経験から「自分にも英語が教えられるかもしれない」という自信がもてるようになった</li> <li>－ 具体的な活動例等を授業で学べたことで、指導のための引き出しを増やすことが出来、指導に対して少し自信がついた</li> <li>－ 英語を教えることに関して少し自信がついた</li> <li>－ 英語力不足は事前の準備でフォロー出来るもので、一旦授業になったら教師のコミュニケーション能力が何よりも重要であると分かり、英語が出来ないことを不安に思う必要はないと自信がついた</li> </ul>
7. その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 英語を身近に感じるようになった</li> <li>－ 自分自身が楽しいと感じられるような活動でないと、子どもたちには難しいだけの学習になってしまうという考えに変わった</li> <li>－ 教えることに対して楽しいと感じられるようになった</li> <li>－ 現場に出たら、大学時代に英語の指導法を学んだという人はほとんどいない環境になると思うので、自分が頑張らなくてはいけないと思った</li> <li>－ 子どもたちと活動するのが楽しみになった</li> <li>－ 履修前は漠然としたイメージしか持っていなかったが、今は具体的に考えられるようになった</li> <li>－ 模擬授業を行ったことで、授業を作る経験が出来、自分にも英語を教えられるかもというプラス思考になれた</li> <li>－ 授業を通して教える楽しさを知ることが出来た</li> <li>－ 少し英語が楽しいと感じるようになった</li> <li>－ 教師の英語力も必要とは思いますが、ALTと一緒に授業することで楽しい意味のある時間を作れると思った</li> </ul>
8. 今後の課題への気づき
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 自分が教師として指導することを考えると、正直不安や心配なことも増えたが、楽しみな気持ちもある</li> <li>－ 興味関心は履修前より高まったが、同時に楽しい授業を作るためには自分の英語力を高めなくてはならないという思いも強くなったので、教える意欲は高まった一方で不安や心配も大きくなった</li> <li>－ ALTの先生と一緒に授業を行うとなると少し不安がある</li> </ul>

表8-3 自由記述結果 (2007年 設問2.)

(表8は複数ページに渡っており表8-1から表8-3と表記した)

<b>9. ALT や英語専科の教員、英語が得意な先生にまかせっきりにして良いと思っていた学生の変容</b>
— ALT にまかせっきりではなく学級担任が主導して授業を進めることが重要であることを学び、「4月から本当に大丈夫かな」と不安に思うようになった
— 授業を進めていく中心人物は担任であることが理解できた
— 週に1回程度やってくる ALT との授業では、初めの数分は探り探りの進行になると思うので、いつも児童と生活を共にしている学級担任が主に授業の流れを作り、担任では指導出来ない英語表現を ALT が担当するといった支え合う授業づくりが必要であることが分かった (11. と同一学生)
— 自分にも学級担任としての役割があることを知ることが出来た
— 完ぺきに英語が話せなくても、児童と ALT との間に入って英語の楽しさやコミュニケーションの大切さを伝えることが出来ることを理解でき、教える意欲が高まった
— 教育実習先で観察した授業が ALT と日本人の英語専科教師による授業で全てが英語で進められていたが、この授業を履修することにより、無理に全て英語で話す必要はないんだと思うことが出来るようになり、気持ちが楽になった
<b>10. 小学校へ外国語活動を導入すること自体に否定的な考えを持っていた学生の変容</b>
— 小学校段階からの英語活動は必要ないと思っていたが、履修してみて、確かにこれからの時代に必要なものであり、やってマイナスになることはなく、むしろ大切にすべきものがたくさんあると感じたが、これは英語活動のみに焦点を当てて考えた場合のことであり、教育活動全体を考えるとその他の教科など他に重要な問題があるという考えは変わっておらず、やっても良いがやらなくても良いものだと思っている
— 外国語活動が国語力低下に拍車をかけるのではないかと考えていたが、授業を受けて小学校英語と国語力低下は思ったほど深く関係していないような気がして、英語活動導入を前向きに捉えようと言う気持ちになった
<b>11. 2007年の選択式設問3. において履修によって自信を「低下」させた学生の変容</b>
— 不安や心配はなくなっていないが「頑張ればやっていける」という気持ちを持つことが出来たことは自分にとっての成長だった
— 知識が増えた分、自分がやってみたいと思いついて描いていたことが現実との壁でやりにくいことが分かり、少し意欲が低下してしまった
— 週に1回程度やってくる ALT との授業では、初めの数分は探り探りの進行になると思うので、いつも児童と生活を共にしている学級担任が主に授業の流れを作り、担任では指導出来ない英語表現を ALT が担当するといった支え合う授業づくりが必要であることが分かった (9. と同一学生)

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

まずは2007年の結果を表8にまとめた。表8を見ると、学生たちは自らの変容を「不安の軽減」、「意欲の向上」、「外国語活動への新しい認識」などの言葉で形容している。多くの学生が履修前に持っていた不安を軽減させ、指導への意欲を向上させていることが自由記述からも読み取れる。また、選択式質問において、履修により「自信が低下した」と回答した学生（表8 11. 参照）も自由記述では前向きな気持ちや指導への意欲を新たにしている様子が見えがえる。ただ、これらの「自信が低下した」と回答したうちの1名の学生は「英語活動について理解するにつれ、自分がやりたいと思っていたことが現実との壁でやりにくいことが分かり意欲が低下した」と記述していた。これ以上の記述がなかった為、推測にとどまるが、例えば英語の文字指導やフォニックス指導、読み指導などに興味を持っていた場合、音声中心の小学校ではこのような指導は困難であることを知って指導意欲を低下させたとも考えられる。

表9-1 自由記述結果（2008年 設問2.）

1. 不安の軽減（英語力）
－ 英語力に不安を持っていたが、ALTと学級担任の役割分担をしっかりと、ALTと協力してやれば大丈夫なのだと思うようになった
－ 英語を話すことに苦手意識を持っていたが、担任が常に前に出る必要はなく、ALTに任せるところは任せて担任として役割を果たせば良いことが分かった
－ 英語力に不安があったが、担任には担任の役割があり、英語力はさほど気にしなくてよいという気持ちに変化した
－ 発音より児童の気持ちに寄り添って、分かりやすい授業をする方が重要であることが分かった
－ 自分の英語力よりも、子どもたちが外国語と楽しく触れ合えるように創意工夫する技術が重要と考えが変わった
－ 英語の発音や英語力だけが重要なのではなく、学級担任として子どもたちが「理解できた」という気持ちを持てるよう支援することが大切なのだと感じた
－ 本場の英語を聞かせることだけが英語活動ではないと感じた
－ ALTと協力して授業を行えばよいということで、履修前ほどの不安は感じなくなった
－ 無理に学級担任が英語を使わなくてもよいということを知って安心した
－ 絶対に押さえない表現は英語でしっかり聞かせ、それ以外は日本語で分かりやすく説明しても良いことが分かり、全くついていけない児童を出さないようにすることが出来ると感じた
－ 自分の英語の発音はALTと協力していけば、それほど心配しなくてもカバーできるとう気持ちになった
－ 無理に英語を使わなくても日本語を交えても良いことが分かり、安心した
－ 英語が完ぺきに話せなくても大丈夫だと分かり安心した
－ 英語力に対する不安はなくなっていないが、英語力不足はALTとの事前打ち合わせや授業準備で解決できる問題であると感じられるようになった
－ 発音が不安な単語は事前に調べて練習しておき、恥ずかしがらずに自信を持って発音すればよいことが分かって不安は少し解消できた
－ 模擬授業で教師役を体験してみて、自分の英語力のなさに不安を感じたが、それよりも教師自身が英語を楽しむ姿勢が大事なのだと理解できた
－ 最も不安に思っていた「自分の低い英語力で授業が出来るだろうか」という気持ちが「自分でも教材開発やALTとの協力によって授業ができるかもしれない」という気持ちに変化した
－ 学級担任となる自分にとっては、最低限の英語力は必要だがそれ以上に子どもたちへの配慮や教材準備などが大切だと理解出来て、少し不安が和らいだ
2. 不安の軽減（外国語活動の内容や授業の流れを学んで）
－ 英語活動への不安がなくなったわけではないが、様々な活動例や授業の流れを知ることが出来、自分でも出来るかも、頑張れそうだ、という思いを持った
－ 小学校外国語活動では何を目標とし、そのためにはどんな活動が考えられるかを具体的に学べたことでイメージが持て、不安や心配が軽減した
－ 具体的な歌やゲーム等を知ることができ、外国語活動に対して積極的な気持ちになれた
－ 履修前は不安ばかりだったが、どのような授業をすればよいのがわかったことによって、自分がまず英語を好きになろうと言う気持ちが湧いた
－ どのような授業準備をし、どのように教えたらいかが分かったことで気持ちが楽になった

小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」  
履修がもたらす学生の変容

表 9-2 自由記述結果（2008 年 設問 2.）

2. 不安の軽減（外国語活動の内容や授業の流れを学んで）
－ 実際にどのような授業をすればよいか分かり、自分でも身の回りの題材からこんな授業が展開できるかな、と考えるようになった
－ 多くの活動やアプローチの仕方を知り、履修前には絶対 1 人で授業なんて無理、と思っていたものが、自分にもできるのではないかという気持ちに変化した
－ 不安な気持ちは変わっていないが、様々な教材もあるし、授業で学んだ活動やゲームの知識もあるので、白紙の状態ですべての授業計画を立てるわけではないという点で安心だ
－ 1 つ 1 つの活動を「聞く」、「話す」などの目的を持って行うことが分かり、教えることへの不安が少しなくなった
－ 指導に関する知識が増えたことにより、不安が減り、教えてみたいという気持ちを持った
－ 授業の組み立て方を学んだことによって、不安だった部分が少し和らいだ
－ 履修前に漠然としていたことが少しずつイメージ化されたので、授業前の準備をしっかりしておけばそんなに怖れることはないのだと安心した
－ 英語活動で行う具体的な活動が見えてきて、少し不安がなくなった
－ 模擬授業や授業内の活動を通して、英語活動を具体的にイメージできるようになり、履修前のどうしたらよいか分からないという不安は少なくなった
3. 不安の軽減（中学校のような英語知識、スキルの指導は求められていないことを学んで）
－ 知識の指導ではなくコミュニケーション能力の素地を養うということが分かり、不安としてあった思いはほとんど払拭されたように思う
－ 中学校以降のように英語のスキル習得を重視するわけではないことが分かり安心した
4. 不安の軽減（その他）
－ 英語の授業をすることに対して不安な気持ちから楽しみな気持ちに変わった
－ 不安や心配がほとんどなくなった
－ 履修前は不安を感じていたが、授業を通して英語に対する視点が変わり、努力すれば苦手意識は軽減できると思うようになった
5. 意欲の向上
－ 自分の英語に対してはまだ自信がなく不安が多いが、やるからには自信を持って取り組もうという意欲を高めることができた
－ 普段の生活の中で英語活動に使える教材を探す意識が強まった
－ 授業を受けて、英語活動がより好きになり、さらに学びたいという気持ちが強くなった
－ 自分ならどのように活動を展開するだろうか考えるようになり、関心や意欲が高まった
－ 不安が全くなくなったわけではないが、子どもたちがいきいきと学べるような授業をしてみたいと思うようになった
－ この授業を履修して、ますます教える意欲が高まった
－ 自分も英語の授業をやってみようという気持ちに変化した
－ 少しだけ抵抗感が減ったように思う
－ あまり失敗を怖がらずに、児童と一緒に自分も英語を学んでいこうという気持ちになった
－ 改めて教えることが楽しみになったと同時に、もっと自分自身が英語について知る必要があるという気持ちを持った
－ 他教科と比べて、まだ英語を指導することには不安も大きいですが、英語活動は「何を学ばせたいか」という目標がしっかりしていれば、自由に方法を考えて授業ができるという前向きな気持ちになった
－ 英語活動への興味は変わることなく、さらに高まったと思う

表9-3 自由記述結果（2008年 設問2.）

5. 意欲の向上
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 他教科の内容を用いた活動を展開する等色々な方法で英語活動をする事が出来る事が分かり、教える意欲が高くなった</li> <li>－ 履修前はどのような内容を指導したら良いのかイメージ出来ていなかったが、具体的なイメージが持てたことにより、自分もこんな授業をしたいという意欲が湧いた</li> <li>－ もっとこんな活動をしてみたいという具体的な気持ちが強まった</li> </ul>
6. 自信の向上
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 履修により少し自信が持て、なんとか授業を出来るかもしれないと感じている</li> <li>－ 具体的なゲームや活動を学んだことで、自分にも指導出来るかもしれないという自信が生まれた</li> <li>－ 「私にできるかな」という気持ちが「私にも出来るかも」という気持ちに変化した</li> </ul>
7. その他
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 履修前は頭で難しく考えていた部分が多かったように思う</li> <li>－ 自分自身が楽しんで学ぼうという気持ちになれた</li> <li>－ 授業を通して小学校での英語活動に対する視野が広がった</li> <li>－ 模擬授業をやったり、他の学生の模擬授業を観ることの大切さをあらためて感じた</li> <li>－ 教えずにはならぬという義務的な感情を履修前には抱いていたが、こんな授業をしたら楽しそうだな、と自分が授業している様子を想像できるようになった</li> <li>－ 履修により、こんな授業をしてみたいという具体的な楽しみに変化した</li> <li>－ 授業の進め方やALTとの役割分担について具体的なイメージが湧いてきた</li> <li>－ この授業を通して、基本的なスキルを習得さえなくてはならないというイメージを持っていたのが、態度面の育成が大切であるという理解に変化した</li> </ul>
8. 今後の課題への気づき
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 模擬授業をしてみて自分の英語力のなさに気付いた</li> <li>－ 履修前は教えることを楽観的に考えていたが、いかに分かりやすく、充実した内容の活動を行っていくかをしっかり考えて授業を構成する必要があることを学び、自分の楽観的な考えを反省した</li> <li>－ 興味や意欲は授業を通じて高まって言ったが、自分の英語力に対しては不安を抱くようになった</li> <li>－ 演習科目の担当者の授業準備が素晴らしく、英語が好きだから教えたいと安易に思っていた自分は準備の大変さを知って、自分にできるかどうか不安になった</li> </ul>
9. ALTや英語専科の教員、英語が得意な先生にまかせっきりにして良いと思っていた学生の変容
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 英語力が最も重要なことではないことが分かった</li> <li>－ 中学校のような英語授業を小学校でも行うものと想像していたが、実際にはかなり違うことが分かり、自分にもできるかもという自信も出てきて、将来の授業に楽しみが持てるようになった</li> <li>－ 英語力に不安な気持ちを持っているのは自分だけではないことを知り、それでも英語を教えたいという意欲を持っている周りの学生たちを見て、徐々に自分も教えてみたいという気持ちになった</li> </ul>
10. 小学校へ外国語活動を導入すること自体に否定的な考えを持っていた学生の変容
<ul style="list-style-type: none"> <li>－ 小学校での外国語活動の必要性に疑問を感じていたが、外国語活動とはただ単に英語を学ぶためのものではないことが分かり、教える意欲が高まった</li> <li>－ 国語力育成の方が重要と考えていたが、実際に授業を受けているうちに英語活動は他教科よりもコミュニケーションを図る機会が多く、積極性や国語力など様々な力を身につけられるものだと感じた</li> <li>－ 導入に疑問を持っていたが、中学校に上がる前に英語への興味を持つことは大切なことであり、小学校で英語活動をする意義はあるのかもしれないと思うようになった</li> </ul>

## 小学校教員を目指す学生の「外国語（英語）活動に関する演習科目」 履修がもたらす学生の変容

次に 2008 年の結果を表 9 にまとめる。表 9 も表 8 と同様に、複数のページに渡っている。

表 9（表 9-1 から 9-3）にまとめた意見を概観すると、ほとんどの学生が不安の軽減や意欲の向上といった変容を自らに見出していることが伺える。しかしながら、履修前に英語力に不安を感じていた学生の多くが英語力以上に学級担任に求められる役割があり、必ずしも高い英語力が指導において必須ではないことを学び、不安を軽減させている一方で、表 9 の「8. 今後の課題への気づき」と見ると授業内での模擬授業をきっかけに自身の英語力への不安を新たにした学生がいることも明らかとなった。また、丁寧な授業準備によって英語力の不足は補えることを理解した学生が多い一方で、多くの授業準備を必要とする外国語活動に不安を抱いた学生もいた（表 9 8.）。

2007 年、2008 年共、多くの学生が肯定的な方向に変容を見出していることは喜ばしい結果であったが、一方で授業を通じて指導への不安を新たにした学生がいることは今後の指導を考える上で重要な結果であったと考える。

### 4. おわりに

本稿は小学校外国語活動指導のための演習科目を履修した大学生がその履修前後でどのように指導に対する意識を変容させたかを質問紙調査から明らかにしようと試みたものである。履修による学生の変化を選択式設問と自由記述から検討した結果をまとめると次のようにいえる。

1. 履修前、学生の多くが外国語活動を担当することに不安を感じていた
2. 特に「英語力が十分でないこと」および「授業のイメージが湧かないこと」に起因する不安を感じていた
3. 2007 年、2008 年共に、小学校に外国語活動を導入すること自体反対という学生が存在した
4. 導入が近い将来のこととして見えてきていた 2008 年の方が導入反対者は少なかった
5. 履修者のほとんどが当該演習科目の履修を通して不安や心配を軽減させた
6. 履修者のほとんどが指導への意欲を向上させた
7. ただし、自らの英語力への不安は完全にはぬぐい去れなかった学生が多かった

概ね履修の効果を感じられる肯定的な意見を得た本調査結果であったが、「英語力」に対して学生が不安な気持ちを抱いていることが今後の課題の 1

つといえるであろう。不安を吐露する学生の具体的な記述は「発音が悪いので児童達に分かりやすく授業できるか不安だった」、「児童が興味を持ってたずねてくる英語の質問にきちんと正しい発音で答えられるか不安で自信がなかった」、「英語が苦手なため、児童に英語の楽しさを伝えることが出来るか不安だった」などであった。これらの不安は教師としての良心の表れであり、しっかり指導したいという気持ち、できるだけ良い授業を児童に提供したいという教師としての気持ちの表れとも考えられる。このような根底にある指導への前向きな気持ちを大事にし、学生が履修後には不安を軽減できるような指導を展開していくことが求められるであろう。

今回の演習科目では、外国語活動で用いられるゲーム等のアクティビティや歌などのレパートリーを増やし、それらをいかに目的を意識して効果的に導入するかを中心に学んでいった。そのため英語そのものの学習や入念な発音練習、クラスルームイングリッシュの練習などは行われなかった。また、ALT とのティーム・ティーチングへの不安を述べる記述も見られたが、学生同士の模擬授業は行われたが、外国人講師との協同授業を体験することはできなかった。このように授業内で十分に行われなかったことが学生の未だ解消出来ない不安へとつながっていることが本調査より明らかになった。今後、小学校外国語活動が本格的に始動することを考えると、「理論」、「演習」に加えて「外国語活動向け英語」を学ぶ科目の開講も求められると考えられる。外国語活動に特化した英語表現や発音を集中的に訓練することにより、学生の英語力に対する不安を少しでも軽減できるのではないかと考える。

最後に、これからの外国語活動に関する大学での授業においても 1 点注意すべき点を述べたい。今回の調査でも小学校時代に外国語（英語）活動を体験した経験を持つ学生が何名かいた。一方で、自分自身の小学校時代に外国語（英語）活動を経験していないが故に指導に不安を抱いていた学生もいた。このようにこれからしばらくは小学校外国語（英語）活動の創世記ともいえる時期に先進的試みとしての外国語（英語）活動を体験した学生と、学習経験を持たない学生が共に大学で学ぶこととなる。また、1990 年代後半から 2000 年代前半は各学校で試行錯誤の試みが行われた時期であり、指導目標、指導内容、授業頻度などあらゆる側面において学校間の差が大きかった時期といえる。そのため、経験者の中でも全く異なる実践を体験してきていることも考えられる。彼らが受けた外国語（英語）活動とこれからの外国語活動の在り方の共通点と相違点をしっかり押さえて指導に当たること、および体験者とそうでない学生双方に分かりやすい授業の展開を考えることがこれからの指導に求められるであろう。

## 参考文献

- 文部科学省（2006a）．「小学校英語活動実施状況調査（結果推移）」．  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/03/06031408/001/002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/03/06031408/001/002.pdf)
- 文部科学省（2006b）．「小学校英語活動実施状況調査概要（平成 17 年度）」．  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/18/03/06031408/001/001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/03/06031408/001/001.pdf)
- 文部科学省（2007）．「平成 18 年度小学校英語活動実施状況調査」．  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/19/03/07030811/004.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/19/03/07030811/004.htm)
- 文部科学省（2008a）．「平成 19 年度小学校英語活動実施状況調査集計結果」．  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/20/03/08031920/002.htm)
- 文部科学省（2008b）．『小学校外国語活動研修ガイドブック』．旺文社．
- 松川禮子・大城賢（2008）．『現場の先生をサポートする 小学校外国語活動実践マニュアル』．旺文社．
- 松川禮子・直山木綿子（2008）．『ゼロから創る小学校英語』．文溪堂．